



第1回女性のための防災講座

2月27日(土) 10時30分～

会場●3階多目的ホール 入場無料

演題●はじめの一步 女性の視点で考える

①東日本大震災で女性が経験したこと ②ワークショップを交えて災害を考える ③子育て、介護中の女性の方に知ってほしい防災(自分と家族の守り方)

主催●北島町役場危機情報管理室(☎088・698・9807)

■北島町では第1回の女性向け防災講座を実施します。地震災害発生時の基本的な知識や、災害時に女性が特に困ることなどを県防災人材育成センター講師に語っていただきます。町備蓄物資の展示と備蓄品の試食もあります。多数ご参集下さい。

外国絵本のおはなし会 クロアチアの絵本

2月27日(土) 14時30分～

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

講師●ドラガナ・ユキッチさん(クロアチア共和国出身、鳴門教育大学教員研修留学生)

内容●クロアチア共和国の絵本の読み聞かせ

東北応援チャリティ公演

大地のうた⑥ / 産土〜つながって幸せの生まれる里

3月6日(日) 14時～

会場●3階多目的ホール

入場料●1500円(前売当日共)

出演●阿部一成(篠笛、愛媛、元鼓童)、竹繁文章(津軽三味線、吉野川市)、高橋宏徳(剣舞)、松獅子舞保存会(獅子舞、鳴門市)、鴨島鳳翔太鼓(和太鼓、吉野川市)、亀本美砂(インド古典舞踊)、武田仁美(ソプラノ)、栗田美佐(ピアノ)

主催●東北応援・プロジェクトあい(村澤☎090・1171・7375)

防災ビデオ上映会

東松島市からのメッセージ

～震災を語り継ぎ未来を創造するために～

3月11日(金) 11時～11時45分

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

主催●北島町立図書館

■震災直後から東松島市図書館が市民の体験談や被災写真等を収集した資料を仙台放送がまとめた映像記録集を上映します。

3.11映画祭in徳島2016★遠藤ミチロウ監督作品

「お母さん、いい加減あなたの顔は忘れてしまいました」上映会

3月11日(金) 19時～

会場●2階ハイビジョン・シアター 無料

作品●「お母さん、いい加減あなたの顔は忘れてしまいました」(2015年、日本 102分) 出演=遠藤ミチロウ、ザ・スターリン246、大友良英、和合亮一、オーケストラFUKUSHIMA!、竹原ピストルほか 監督=遠藤ミチロウ

■3.11映画祭in徳島運営事務局(チャーリーブラウン神農☎088・679・9776)

■還暦ツアーのさなかに起こった東日本大震災。故郷福島は津波と原発事故に襲われた。遠藤ミチロウは、大友良英、詩人の和合亮一と共にプロジェクトFUKUSHIMA!を立ち上げた。そして、距離を置いていた故郷と正面から向き合うことになった■ライブの旅と行く先々での人々との対話を描くロード・ドキュメンタリー。演奏ミチロウ堂々の監督作品がここに登場■当映画祭は、全国の有志の自主上映会をつなぎ、社会へのアクションとする活動です。映画を通じ、意識や問いを共有し、身近な人たちと話すキッカケをつくります。毎年3月11日前後に、東京のアーツ千代田3331をメイン会場に全国のサテライト会場で同時開催します■今年、遠藤ミチロウ監督作品があったため、徳島では縁のある北島町創世ホールを会場とし、同時にミチロウ氏の畏友・地引雄一氏講演会の連帯イベントとして開催。

地引雄一◎講演会

東京ロッカーズからプロジェクトFUKUSHIMA!へ

国産同時代音楽37年間の目撃証言

3月20日(日) 14時半～(開場14時)

会場●3階多目的ホール 入場無料

講師●地引雄一(写真家、文筆家、プロデューサー 66歳)

主催●北島町立図書館・創世ホール(☎088・698・1100)

■かつて福島県の山村を訪れ家族写真を撮影していた青年が、パンク～ニューウェイヴ音楽シーンに深く関わり、時を経て被災地支援で再び福島と向き合うようになった■その足跡を貴重写真と対話でたどる試み■恒例の創世ホール講演会に、我が国のパンク～ニューウェイヴ音楽に黎明期から深く関わってきた地引雄一氏が登場。東京ロッカーズから大友良英・遠藤ミチロウ・坂本龍一らと被災地支援に取り組むプロジェクト FUKUSHIMA!に至る活動を語り、熱気あふれる国産同時代音楽シーンから日本の行く末を見つめる。聞き手=小西昌幸

(▲写真右上=リザード、1979 地引雄一撮影 ▼写真右下=地引雄一氏近影 青木一成撮影)

笑福亭たま・旭堂南湖二人会⑧

3月29日(日) 13時半～

会場●2階ハイビジョン・シアター

入場料●前売/大学生・一般1500円、小・中・高校生1000円(当日各500円増)

出演●笑福亭たま(上方落語家)、旭堂南湖(上方講師)

演目●落語「ちしゃ医者」ほか1席(お楽しみ)、講談「赤穂義士銘々伝より 神崎与五郎の詫び証文」ほか1席(お楽しみ)

主催●たま・南湖二人会実行委員会(☎088・698・1100)

■毎度おなじみ上方演芸界を背負う2人のプリンス笑福亭たまと旭堂南湖(きょくどう・なんこ)、9回目の二人会。今回も超満員必至!健康増進・抱腹絶倒! お見逃しなく。



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

探録◎中相作講演会

永遠の十三～海野十三と江戸川乱歩①

2014年5月17日(日) ●北島町立図書館2階ハイビジョン・シアター

●創世ホール・アーカイブスの一環として、2014年に海野十三の会主催で開催した中相作(なか・しょうさく)氏講演会「永遠の十三～海野十三と江戸川乱歩」の講演探録を連載でお届けします。文責は全て小西昌幸にあります。(文中一部敬称略)

■中です。今日、お手元にお配りした資料に基づいてお話しを申し上げます。皆さんもご存じのとおり、海野十三というのは日本SFの開拓者。日本にSF小説というジャンルを開拓し確立した人とされております。それはそのとおりなんですけれども、今日は、江戸川乱歩一日本に探偵小説というジャンルを開拓し確立したパイオニア、その乱歩と十三の関係についてお話するわけですから、SFというのはわきにおいて、日本の探偵小説の大きな流れの中で乱歩がどういう役割を果たし、十三はどういった位置を占めていたのか、そういう探偵小説の大きな流れの中で、二人はどのようにたがいの人生を交錯させたのか、そして二人の人生に、戦争はどのように影を落としたのか、というようなことを簡単にたどってみたいと思います。お付き合いをお願いします。

■ヨコ組み頁の1頁目から始めます。ここには、十三と乱歩の年譜を用意したんですけれども、これは乱歩の誕生から始まっております。乱歩が生まれたのは明治27年、三重県名張町新町に生まれるということになっております。

■その3年後、十三が生まれております。明治30年ですね。十三は、ちょっとデビューが遅かったので、乱歩よりも世代が下かという印象を受けやすいんですけど、実は3歳下なだけで、例えば横溝正史よりも年上の作家でした。ただ、探偵小説壇へのデビューが遅かったせいで、あまりそういう印象がないわけです。

■それで、まず江戸川乱歩のデビューは大正12年のことになります。「新青年」という雑誌に「二銭銅貨」を発表して、デビューいたします。二銭銅貨というのは今お配りしたお菓子ですね。そのお菓子は乱歩の「二銭銅貨」にちなんで名張の和菓子屋が作ったものです。

■乱歩のデビューに至るまでの日本の探偵小説の歴史を、簡単に確認しておきたいと思えます。探偵小説とは一言でいうと何か。ごく簡単に言ってしまうと、「謎解きの面白さを主眼とした小説」です。謎解きというのは、最初に謎が出てきて、その答えは何であるかが最終的に分かるという、そういうことです。謎というのは、日本人のみならず世界各国の人の興味を強くひくもので、例えば昔でいいますと「スフィンクスの謎」というのがありました。前を通りかかった人にスフィンクスという怪物が、「朝は4本足、昼は2本足、夕方は3本足の生き物は何か」という謎を出して、答えは「人間」なんですけど、その謎々に答えられなかったらスフィンクスに殺されてしまうというお話です。つまり謎というのはそれくらい昔から、人々の興味をひいて、面白がらせていたものでありますから、探偵小説が生まれるまでも、謎解きの面白さを題材にした文学作品はたくさんありました。それこそ古代から、日本の神話を見ても謎の面白さをモチーフにしたエピソードがたくさん出てまいりま

す。江戸時代になると印刷技術が発達しまして、色々本も出版されるようになりましたから、江戸時代にも謎の面白さを追求した小説がたくさん書かれて、庶民に受け入れられるようになりますけれども、一般に探偵小説というのは明治時代になってから、海外から輸入されて日本に根付いたものとされております。明治時代になって、西洋から色々な文物が輸入されてきて、その中に探偵小説もあったというわけです。欧米で大変人気を集めた小説が日本に入ってきて、それが日本語に翻訳されて読者を楽しませる。そういう時代がまずありました。

■その時に大きな役割を果たしたのが、この資料には書いてないんですけど、黒岩涙香(くろいわ・るいこう)という人です。この人はジャーナリストです。新聞なんかを出していた人で、本名・黒岩周六。蝮の周六といわれるくらい、食いついたら離さないつこいジャーナリストだったということが知られております。

■例えば彼は、当時の蓄妾(ちくしょう)制度を批判するわけですね。蓄妾というのは、妾をたくわえるという意味で、当時のエライさんがお妾さんを囲ってそこに通ったりするんですけど、これから西洋に伍して国際社会で伸びていかなければいけない国家が、こんな昔の制度を残している。この大切な時期に妾をたくわえるようなことをしてはいけぬ、これはジャーナリストとして糾弾しなければならぬ、ということで、どうするかといいますと、張り込みをするわけです。当時の『フォーカス』とか『フライデー』みたいなものなんですけど、妾の家のそばに隠れていて「あ、伊藤博文がこの家に来たぞ」となると、伊藤博文がまたあの妾の家に行ったみたいなのを記事にして、そうすると新聞がまたよく売れるということで、そういう仕事をしていた人です。暴露的な記事を書く以外にも、新聞で面白いクイズをやってみたり、色々ジャーナリズムを面白くするために頭を使った人なんですけど、新聞の大きな売りの一つにしたのが、探偵小説でした。

■それは西洋の探偵小説を原書で読んで、面白いと思った作品を日本語に変えて連載するわけなんですけれども、これは今やっているような忠実な訳ではありません。大きな筋はそのままにして、細かいところは日本人の読者にも分かりやすいように変えてしまいます。例えば名前なんかはヨコ文字の名前というのは覚えにくいですから、全部日本人の名前にして、明らかにロンドンの話であるのに、輪田お夏というような日本の名前が出てきますから、今読むと違和感があるんですけど、当時の人には、むしろそっちの方が親しみやすかったと思われれます。それでたくさん海外の作品を日本語に直して、それが明治20年代ぐらいに大変評判を呼びまして、探偵小説の面白さというのが、まずその時代に日本で知られました。

■で、そうなるほかの出版社なり作家たちも、探偵小説が売れているのに目をつけて、探偵小説のシリーズを出してみたりするわけです。ただしそれは日本人作家・既成作家に「お前も一度探偵小説を書いてみないか」と言って探偵小説を書かせたようなシリーズで、探偵小説専門の作家はまだ存在しておりませんでした。そういった探偵小説のブームもやがて過ぎまして、今度は探偵実話、ドキュメントといいますか、そういうところに行くんですけど、そのあとまた探偵小説の波がやってきます。今度は翻訳ですね。さきほど申しました黒岩涙香の訳は翻案と呼ばれるもので、だいたい筋を取

り入れて日本人向けに書いていたわけですが、それに対して翻訳というものは、海外の作家の作品を日本語に訳したものであると、つまり外国人作家の名前が書かれて、その横に翻訳者の名前が記載される。そういう形で発表される翻訳小説の時代が始まりました。

■その舞台の一つが、資料に《大正12年、乱歩『新青年』にデビュー作「二銭銅貨」を発表》とありますけれども、この『新青年』という雑誌で、創刊されたのは大正9年のことです。大正9年は実は、黒岩涙香が死んだ年でもありますから、この年に黒岩涙香の時代が終わり『新青年』の時代が始まったということになります。『新青年』はどういう雑誌かといいますと、地方の青年を対象にして、君たちもこれからどんどん海外に雄飛しましょうと地方の青年を鼓舞するような雑誌だったんですけども、たまたまこの雑誌を編集していた森下雨村という人が、探偵小説が好きだったんですね。

★★(次号に続く)★★

文化ジャーナル総目次★第4回

■「創世ホール通信」が通算250号を迎えたことを記念して「文化ジャーナル」総目次を連載しています。作成に当たっては、町教委事務局内北島町史編纂事務担当の小林由佳さんのご尽力をいただきました。記して謝意を表します【凡例：号数、発行年月日、記事タイトルの順に掲載。特記なき場合は、全て小西昌幸が記事執筆】

No.	発行年月日	記事タイトル
240	2015・01・01	「創世ホール通信」発行20年／山田太一さん、早春スケッチブック
241	2015・02・01	〔講演探録〕出版芸術社社長・原田裕「日本文芸の大転換期～戦後というとてもつもない時代①」
242	2015・03・01	〔講演探録〕出版芸術社社長・原田裕「日本文芸の大転換期～戦後というとてもつもない時代②」／〔新刊紹介〕紀田順一郎『幻島はるかなり』
243	2015・04・01	〔講演探録〕出版芸術社社長・原田裕「日本文芸の大転換期～戦後というとてもつもない時代③」
244	2015・05・01	〔講演探録〕出版芸術社社長・原田裕「日本文芸の大転換期～戦後というとてもつもない時代④」
245	2015・06・01	〔講演探録〕出版芸術社社長・原田裕「日本文芸の大転換期～戦後というとてもつもない時代⑤」／〔情報メモランダム〕デイヴ・シンクレア&ジミー・ヘイスティングス
246	2015・07・01	〔講演探録〕出版芸術社社長・原田裕「日本文芸の大転換期～戦後というとてもつもない時代⑥」／〔新刊紹介〕根本圭助『忘れ得ぬ人々・思い出の風景』北辰堂出版
247	2015・08・01	遠藤ミチロウと徳島県北島町 創世ホール公演の足跡
248	2015・09・01	〔情報メモランダム〕【戦後70年 文学に描かれた戦争】展／ことのは文庫に海野十三「降伏日記」収録／芥川賞作家・柴崎友香さんと海野十三／創元推理文庫から海野十三作品集2点刊行／旭堂南湖さん、岩波書店『文学』に登場／松村進吉『超怖い話乙(きのと)』／東雅夫編、佐藤春夫著『たそがれの人間』
249	2015・10・01	北島トラディショナル・ナイト 激動風雲疾風怒濤・19年の足跡
250	2015・11・01	文化ジャーナル総目次第1回
251	2015・12・01	文化ジャーナル総目次第2回
252	2016・01・01	文化ジャーナル総目次第3回